

異文化の壁を乗り越えよう

顧 令儀 (西安交通大学人文社会科学学院歴史文化研究所)

異文化体験

普通から言えば、異文化とは自分と異なる民族や国の文化と指す。我々は異文化と出会った時に、未知な物に対する好奇心や恐怖心、そして好きや嫌いなどの様々な感情が生まれてくる。何故このような感情が生まれるかという、出会った異文化が自分の元々持っている文化と異なるからである。

日本は中国の近隣で、文化的なレベルでいうと似ている部分も結構多い。それでも、私は一留学生として違和感を感じたことがいっぱいあった。

この間、久しぶりに山口に戻って、私がさんざんお世話となった日本の友人と一緒に食事をした。その三日後に、再び友人と会った時に、私は中国人の立場から驚く言葉を耳にした。

「この間どうも…」

中国人なら、何故自分が感謝されるかが分からないはずである。食事は奢っていただいた、別に感謝されること何ひとつもしていないのに、感謝されている。中国ではあり得ないことである。その日の食事はその日で終わったはず、私からもその場で感謝の意を表した。中国ではそのことはもう一段落着いたが、日本では違う。本来日本の習慣ならば、私が再び友人と会った時に、「この間どうもありがとうございました。」と言うべきであった。私は長い間に日本に住み、

頭の中で分かっている、中々実行することができない。むしろ、それを実行する習慣が身につけていないと言ったほうが良い。厳しい日本人の目からして見れば、私はこの悪習慣ですでに無礼者となったのかもしれない。しかし、中国人の目で見れば、日本人が面倒臭いと感じた時もある。

それは、仲の良い日本の友人と一緒に中国で旅行した時のことである。中国人の私が案内役でタクシー代と二人分の入場料を払っていた。彼女が私に「いくら出せばよいか」と聞いた。正直に言えば、私も自分がどれぐらい払ったかは確かではなかった。そこで、彼女に食事を奢ってもらうにした。

中国では、交通費から入場料まで細かく計算し、割り勘することはあまりしない。そのようなことをすれば、きっと友人にケチだと笑われる。親切された分は食事やプレゼントで返すのが中国の流儀である。ちなみに、中国では「食事に行こうか」と誘った方が全額のお金を払うのが普通である。今回誘われたら、次回誘えばいいという考えから、割り勘することはほとんどない。

日中文化の差異があっても、私は多くの日本人と友達となった。文化の差異は話題ともなり、交流の壁となったことはなかった。しかし、現在でも、異なる文化を持っているということで差別や迫害を受けたり、戦争まで発展する事例

が多く存在している。何故異文化がこんなことを引き起こすのであろう。それは異文化に問題があるのではなく、異文化と接する我々の心に問題があるとも言えよう。

同一文化なかの異文化

日本では、文化が異なるから、失礼なことをするのかもしれないという心配から、外国人と交流するのは難しいという人もよくいる。それなら、同じ文化を持っている人たちは交流しやすいという結論に繋がる。しかし、私はそもそも同一文化が本当に存在しているかという質問を持っている。むしろ、異なる文化はどこにも存在し、例え同一文化でも、沢山の異文化によって構成されているのが普通である。

私は日本と中国の差異を体験してきた。しかし、国籍が中国だけで、私はすべての中国文化を代表できず、その中のほんの一例に過ぎない。同じく、私と接した日本人も大きな日本文化の中の一例に過ぎない。

中国の中では、56の民族が存在し、厳密に言えば、それぞれの民族が自分の歴史や信仰、服装を持っている。つまり、中国文化は異なる文化によって構成されている。現在人民元の上でもモンゴル、チベット、壮族、ウエーグルという四つの民族文字が印刷されている。勿論、実際自分の文字を持っている少数民族はこの四つの民族に止まらない。

私は満民族の出身であり、中国国内でも常に異なる文化と向き合ってきた。高校時代の親友は回民族の出身で、イスラム教の信者でもあった。彼女と一緒に食事する時に、豚の料理は回避してきた。私たちは同じ都市で、同じ中国語を喋っているが、文化的なレベルでは違う世界に住んでいた。それでも互いに何でも話せる大親友となった。

一方、同じ漢民族でも、北方の言葉も料理も風習も南と大きく異なっている。春節の時、北方では「餃子」を食べるのが普通であるが、南方では「年糕（お餅）」を食べる。その背景には、北方が麦を多量に生産するに対して、南方では稲作が多いという文化の差が存在している。料理の味も地方の気候や産物によって異なり、同一文化に属していると思えないほど多様である。

しかも、文化は常に変動していることを忘れてはいけない。改革開放以後、香港映画が内陸でブームを引き起こしていた。内陸の人たちも面白半分て広東訛りで話すのが流行であった。標準語を乱しているという理由で、母は「広東語」が大嫌いで、テレビの中に「広東語」を話す人が出るたびに、「何を言っているかはわからない」と文句を言っていた。

しかし、中国言語の歴史を辿ってみれば、今の「広東語」の発音や文字は唐の時代の言葉に最も近い。現代中国語で唐詩を読んで、発音がおかしいと思えば、「広東語」で読んだら納得が行くこともある。逆に現在西安に住んでいる人たちが話す中国語は唐の時代と大分異なっている。我々が批判している物が案外自分の伝統文化だということは皮肉にも思わせる。

その逆の例もある。伝統文化だと思っても、実際は伝統ではないこともある。「旗袍」（チャイナドレス）は現在最も中国を代表できる服装となっている。満民族は八旗に分かれ、満民族の人々が旗人と呼ばれていた。「旗袍」その名前からもそれが清を統治していた満民族の服装と思わせる。

しかし、満民族の服装はゆったりしていて、「旗袍」とは異なる服装である。実際のところ、最初に「旗袍」を身に纏ったのは「上海灘」の売春婦であった。スタイルよく見られるためである。売春婦の服装が故に、最初にこの服装を

着た女性たちは異端として、さんざん批判を受けたに違いない。しかし、今日に立ってみれば、中国の伝統服装を着ていることとなる。

つまり、現在の我々にとってのあらゆる伝統文化もかつて新生事物として世の中に存在していた。特に東アジアでは、文化の繋がりが深く、日本文化も中国文化と同じく、様々な異文化を含みながら、新しく成長している。しかし、我々はその文化の動きに中々気づいていないのも現実である。

中国では、「現在の年青人啊（現在の若者は）…」という嘆きの後ろに、いつも批判的な言葉が付いてくる。私は日本人と話している中で、おそらく日本にも同じ傾向があると感じていた。趣味から生活スタイル、お金の使い方、志まで、悉くあらゆる方面では、若者が批判されがちである。そして、定番の結び方として「想当年我像你这么大的时候（当初私が君ぐらいの歳では）…」が待っている。

実は、どうして母が私の趣味を認めてくれないだろうと、私が中学生の時からずっと困惑していた。漫画やアニメがつまらない物となり、ゲームをすることは悪道に入る一歩手前となり、聞いていた歌すら母親に「訳の分からない歌だ」という評判を貰った。それに派手な服を着ると、売春婦みたいだと言われ、地味な服を着ると、乞食よりも劣っていると言われていた。小説家である母の言葉だから、多少大げさになっているが、私の趣味が気に食わないのが確かである。

むしろ趣味だけでなく、学校での成績、友達との付き合い方、私の書いた絵まで、私は全方位から母の辛口を浴びた。私は、母親が私に対してもう失望したかと思っていた時期もあった。しかし、時が経てば、私は段々と母の気持ち分かるようになってきた。勿論、母の気持ちが分かったとあって、私の趣味を変えた訳で

はない。ただ何故母が私に対して気に食わなかったかが理解できるようになっただけである。

そのきっかけは、私は何気なく友達とお喋りしていた時であった。

「最近なんか良い歌ある？」

「ううん、ほとんどないわ。」

よく考えてみれば、良い歌ないはずがない。母が私の好きな歌を認めてくれなかったように、私も最近の歌を認めようとしなかっただけである。何故私も母と同じくなったかを考えてみると、その原因は慣れないものに対する拒否にあるのではないかと思っていた。

しかも、我々は文化の変化にあまり気付かずというより、その変化を拒否しがちである。中国では、私と母の間のバトルを「代沟」（世代間のギャップ）と呼ばれている。実際は新しく生成した文化と既存している文化の摩擦とも言える。

文化は、珊瑚が少しずつ成長し、いつの間にか大きな珊瑚島となったように、成長するものだと、私は考えている。そして、文化は常に変動している。言い換えれば、異文化であれ、新しくできた文化であれ、我々は自国にいても常に見たことのない文化と向き合わなければならぬ。そのために、異なる文化は人間同士が交流の壁ではない。関西人が関東人と友達になれるように、中国人も日本人もあるいはどこ国の人も友達になれるはずである。

異文化と向き合う

異なる文化が壁となり、人間同士がうまく交流できない、このようなことはどこの国にも存在しているであろう。しかし、私は異文化が壁となったというよりも、人間が自ら交流の壁を作っていると考えている。

中国国内では、文化は出身地、民族、学歴、

職業などによって細かく分類されている。我々はこの数多くの文化の交差点に立っている。その中で、自然にできている文化もあれば、人間によって定義されている文化もある。

私の故郷となる西安の北部では、戦争や不作のため、避難して来た河南省から移住者が多く住んでいた。この人たちは、従来の西安の原住民から受け入れなくて、貧乏で治安の悪い都会の北部に住み続けていた。何十年過ぎた今も、移住者たちの子孫は河南省の方言で喋っている。近年は改善されたが、西安の原住民は長い間に彼らを仲間としなかった。その出身者と結婚することすら強く反対していた。

ほぼ同じ文化を持っている 河南省から移住民に対して、何故西安の原住民は平等の心をなくし、偏見を持っていたのであろう。それは移住民が戦争や飢餓から逃れてきた難民からであった。西安の原住民は彼らに対して優越感を持っていた。そこで優越感が交流の壁となり、出身地で人を判断するようになった。これは自然にできた異文化というよりも、偏見によって人為的に作られた「異文化」である。

西安の原住民が持っていたような優越感は様々な領域に潜み、様々なところで偏見という壁を作っている。中国では、学歴の高い人たちを「文化人」と称し、人を軽蔑する時に「没文化」（文化がない）と言う。また、昔の中国では「重農軽商」の思想が強かった。その影響で、今の知識人でも「无商不奸」（ずるくない商人はいない）を理由に、自分と同じ文化領域に属していることを認めない人がいる。

中国だけでなく、世界中にそのような傾向がある。我々が世の中の文化を見た時に、各国の経済力や軍事力、影響力で文化を評価しがちである。するとアメリカの文化が最も優れているものとなり、自分の国より発展の遅れている国の文化が劣っていることとなる。そして、自分

より社会地位の高い人達が優れた文化を持ち、地位がなく貧乏な人達には文化が存在しないというよりも、その文化をなくしても大丈夫と考えている人がいる。そこで、異文化ではなく、偏見が我々がうまく交流することを妨げたとも言える。

留学していた時に、私は中国人であるが故に、歩道の真ん中で、「帰れ」と怒鳴られたことがある。最初は怒りいっぱいであったが、今ではこの体験を鏡として、自分自身を常に見ている。

「己所不欲、勿施于人」（自分がほしくないものは、他人に与えないことだ）という中国の古語があった。すべての文化には共通点がある。それは人間がそこにいるから文化が成り立っていることである。日本文化や中国文化という前に、我々は一人の人間である。人間なら言葉が通じなくて、笑顔や気持はどここの国でも、どの文化でも同じである。常に相手の立場に立って、相手の気持ちになって物事を考えれば、異文化の壁を乗り越えて、どんな相手ともうまく交流できるはずである。